

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660056

研究課題名(和文) 母乳分泌量維持要因の探索的研究～NICU入院中の母親の肯定的体験～

研究課題名(英文) Exploratory research of the amount maintenance factor of mother's milk secretion

研究代表者

佐藤 祥子 (SATO, Sachiko)

東北大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：50271961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、母乳分泌量が維持されている母親の、出産直後からの搾乳体験を明らかにし、搾乳への思いと実態を明らかにすることである。その結果、早産児を持つ母親の搾乳体験は【精一杯の産後】から始まり、入院中から【目覚ましをかけて搾乳】となり退院後【搾乳の困難にぶつかる】体験をしていた。搾乳の困難は、【家族の助け】を借りて乗り越えNICU面会などポジティブ体験を【搾乳へのモチベーション】として活用し、産後1か月までに【自分のライフスタイルに合わせた搾乳】となっていた。退院後早期に本人の生活に合わせた搾乳の見直しの提案をする機会が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify milking experience from immediately after childbirth of the mother by whom the amount of mother's milk secretion is maintained, and to clarify the thought and the actual condition to milking. Study design: Qualitative induction research. As a result, the milking experience of mother having a premature infant, classifies into six categories and 14 subcategories as a result of analysis. The milking experience of mother having a premature infant, begin with after giving birth as hard as possible. It became the milking for rousing from all over the hospitalization and, after a discharge, did an experience to hit the difficulty of the milking. An opportunity to propose reexamination of milking united with the life of the person himself/herself is required for the early stage after leaving hospital.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：早産 搾乳体験 母乳分泌維持 NICU

1. 研究開始当初の背景

NICUに入院する児は早産児であることが多い。早産児は吸綴・嚥下反射が発達してくる修正週数 35 週ころまで直接授乳ができないことが多く、母親は児が成熟するまでの間、母乳分泌を維持するために搾乳を行わなければならない。母子分離の場合、母乳分泌量の維持のためには1日8回以上の搾乳による乳頭刺激が推奨されているが、自宅では家事など生活をしながら児への面会に通い、搾乳を定期的に継続するのが難しいことも多い。また、鎌田(2009)は超低出生児を出産した母親の母乳分泌量を、児の修正月齢6ヶ月の時点まで追跡研究しているが、搾乳を継続していたとしても、時間が経過するにつれて母乳分泌量の低下が見られたことを報告している。これは、児が成長し、直接授乳が可能となる時期に母乳分泌量が低下して、母乳育児を困難にさせている要因となっている。

さらに、母乳分泌量が低下する要因の1つに心理的要因が挙げられる。江南(2008)によれば、児がNICU入院中の母親は「早産や障害に対するショック」、「赤ちゃんへの罪悪感」、「母乳分泌が少ないことへの不安」、「産科病棟入院中の孤独感と寂しさ」があると言われている。これらの心理的要因は、母親の精神的ストレスとなった場合、母乳分泌量の低下の一因となる。

以上のように母乳分泌量が低下する要因を調査している研究は存在するが、どのようにすれば母乳分泌量が維持できるのかを、母親の実体験から調査している研究は少ない現状である。

本研究における肯定的な側面とは、母乳分泌量を維持するためにプラスに働いた自分自身の体験や周囲から(家族・看護者など)支援されている、応援されていると感じた体験とする。

2. 研究の目的

2010年4月に、「NICUに入院した新生児のための母乳育児ガイドライン」が発表された。これは、直接授乳を成功させるために看護者による精神的なサポートや情報提供・助言が不可欠であることを示している。これまでの研究は、搾母乳の方法や母乳分泌不足に関する研究が主流であり、母乳分泌量が良好に維持されている母親を対象とした研究はほとんどない。そこで、本研究は、母乳分泌量が良好に保たれている母親の肯定的な側面に焦点を当て、母乳分泌量が維持される要因を記述的に明らかにすることである。母親の実体験から得られる結果は、NICUに入院した新生児の母乳育児推進に役立つであろう。また、看護者はより快適に続けられる搾乳環境の提供に繋がるであろう。

3. 研究の方法

研究デザイン：質的帰納的研究

対象者：妊娠 23~32 週未満で出産し、児が NICU 入院中である基礎疾患のない初産婦で、産後 1 か月健診時に直接授乳を開始しておらず、母乳分泌量が 500ml/日以上維持されている母親とした。

研究期間：2011 年 7 月~2012 年 11 月

研究場所：A 病院周産母子センターNICU・GCU, MFICU

データ収集・分析方法：

NICU 入院児を持ち、母子分離下において母乳分泌量が維持されている母親の、搾乳に対する思いと実態について半構造化面接を行った。インタビューガイドを作成し、面接時間は1人につき30分から1時間であった。面接の内は許可を得てICレコーダーに録音し、それを基に逐語録を作成した。作成した逐語録から、母乳分泌に影響を及ぼしたと思われる文節をコードとして、コードからカテゴリーの作成を行った。そして、比較継続的に分析を繰り返し、カテゴリー間の関係性を見た。また、分析の際には母性看護の研究者からスーパーバイズを受け、信頼性と妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮：

研究への参加は自由意思によるものであり、拒否、中断した場合も診療上の不利益はないこと、面接はプライバシー保護のため個室で行うこと、収集したデータは匿名性を保持した上で厳重に保管し、研究終了後全てを速やかに破棄すること、研究結果については本研究以外には用いないことを口頭と書面にて説明し、同意を得た。同意が得られた時点で、同意書を交わした。論文として発表する際にも個人情報の保護を約束した。研究に対し質問などがあった場合は誠意をもって対応し、説明書には連絡先を明記しいつでも連絡が取れるようにした。また本研究は、東北大学医学系研究科倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

(1) 対象者の属性

対象者は、産後 1 か月健診を終了し、母親に異常を認めず、出産した児がNICU入院中である初産婦、母親 20 名である。

対象者の平均年齢：31.2±7.5(M±SD)歳、分娩週数：27.5±2.4(M±SD)週、インタビュー時期：産後 32.9±9.1(M±SD)日であった。搾母乳分泌量の平均は 648±250(M±SD)ml であった。分娩様式は 19 名が帝王切開分娩、1 名が自然分娩であった。

(2) 分析結果

分析の結果、6 カテゴリー、13 サブカテゴリーに分類された(表1)。

以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは で表す。

表1. 母親の搾乳体験

カテゴリー	サブカテゴリー
精一杯の産後	急な出産への不安 いたみの経験 いわれるがままの搾乳
目覚ましをかけて搾乳	気持ちと身体がばらばら 搾乳へのめり込む
搾乳の困難にぶつかる	夜間搾乳の困難 迷いながらの搾乳
家族の助け	精神的な支え 家事などへのフォロー
搾乳へのモチベーション	子どもの成長が目に見えるうれしさ ハッピーエンドへの期待
自分のライフスタイルに合わせた搾乳	自分のやりやすい方法の発見 搾乳は生活

早産児を持つ母親は、分娩直後から<急な出産への不安>と子どもがそばにいない寂しさと帝王切開による疼痛という<いたみの経験>をしながら、看護者から<いわれるがままの搾乳>を開始しており、早産となったことに心も体もついていけず【精一杯の産後】を経験していた。

そして、子どもに母乳を届けなくてはいけないと思いつつも身体がついて行かず<気持ちと身体がばらばら>を感じながらも<搾乳へのめり込む>ようになり【目覚ましをかけて搾乳】をしていた。

退院後、NICU入院中の子どもへの面会や家事などの疲労から<夜間搾乳の困難>や搾乳量を増やすために、良いといわれることを試し<迷いながらの搾乳>となり【搾乳の困難にぶつかる】を経験していた。そこから抜け出せたのは、夫をはじめとする家族の<精神的な支え>や<家事などへのフォロー>を中心とした【家族の助け】であり、面会時に感じる<子どもの成長が目に見えるうれしさ>や、子どもを抱っこすることなどを想像し<ハッピーエンドへの期待>を膨らませ、子どもがいない生活を<今は赤ちゃんが休ませてくれてい>とポジティブに捉え【搾乳へのモチベーション】を維持していた。

さらに、産後1か月までに、搾乳方法や搾乳時間が固定されるなど、母親自身で搾乳の工夫がなされ<自分のやりやすい方法の発見>となり、<搾乳は生活>と言えるほどに【自分のライフスタイルに合わせた搾乳】となっていた。

(3) 考察

早産となった母親は、<急な出産への不安>を持ったまま<痛みを経験>をしながら搾乳を開始していた。出産自体が突如決まり、母親は分娩体験を受け入れられないままにいる可能性がある。更に、早産により母児分離状態となり、それが、母親のこころのいたみを助長させることに繋がると考える。早産児を出産してしまったという自責の念も感じていることが明らかになっているが、こころのいたみを少なくすることで、母親を前向きにできるのではなだろうか。

また、こころのいたみと一緒に身体的な痛みを経験していることが明らかになった。これは、対象者が帝王切開分娩であったという特徴があるが、超早産の場合は帝王切開率が高く、早産を余儀なくされた母親は、術後の疼痛を経験していると推測される。その中で、さらに後陣痛を増強させる搾乳は、母親にとって苦痛しかないかもしれない。しかし、2010年4月に、「NICUに入院した新生児のための母乳育児ガイドライン」に示されているように、分娩後6時間以内の搾乳と1日6回以上の搾乳は必要である。初回の搾乳については、自分でしなければいけないという実感がなく、また、いたみの体験によって<いわれるがままの搾乳>となり、母親はなぜ搾乳するのかを理解しないままに【目覚ましをかけて搾乳】へ繋がったのではないかとと思われる。それが【搾乳の困難】にも繋がっている可能が考えられた。

一方で、母親は<急な出産への不安>も感じており【精一杯の産後】を送っていることが明らかになった。早産児を出産した母親の不安を軽減するために、切迫早産での入院が長期に及び出産となった母親にはねぎらい、自分の出産が受け入れられるようバースレビューが必要であると考えられる。看護者は、母親の精神的・身体的状況を見極め、母親との関わりの中で母親の思いを傾聴し、傍に寄り添い受容することが重要である。

また、【搾乳の困難】から抜け出すには【家族の助け】を得ることが必要であることが明らかとなった。家族に対して搾乳についての説明をすることで、家族の協力が得られやすいと思われる。さらに【授乳へのモチベーション】を維持させるためには、母親の体験をポジティブに捉えられるような看護者の支援が必要である。また、搾乳についての指導を覚えていない場合も考えられるので、いつでも母乳について相談できる窓口を作ることが必要とされていると考える。

さらに、【自分のスタイルに合わせた搾乳】を確立させるためにも、退院後早期に本人の生活に合わせた搾乳の見直

しの提案をする機会が必要である。母親の搾乳スタイルを把握することで、現在の母親の心理状態や家族の対応などを知ることができ、それが契機となって搾乳に変化が現れることを期待したい。そのためにも、早産児を出産した母親専用の母乳外来の設置が必要ではないかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

佐藤祥子, 松浦唯, 早産児を持つ母親の搾乳体験, 第 23 回日本新生児看護学会, 平成 25 年 12 月 1 日~2 日, 金沢市

石橋和美, 佐藤祥子, NICU 入院時を持つ母親の出産体験, 第 54 回日本母性衛生学会学術集会, 平成 25 年 10 月 4 日~5 日, 大宮市

佐々木彩香, 佐藤祥子, NICU 入院時を持つ母親の初回面会時に抱く肯定的感情, 第 54 回日本母性衛生学会学術集会, 平成 25 年 10 月 4 日~5 日, 大宮市

佐藤祥子, NICU 入院時を持つ母親の母乳分泌維持の要因, 第 22 回日本新生児看護学会, 平成 24 年 11 月 25 日~26 日, 熊本市

佐藤祥子, 加藤唯, 渡邊あゆみ, 小野寺恵, 大桐規子, NICU 入院中の母親における母乳分泌維持の要因, 第 53 回日本母性衛生学会学術集会, 平成 24 年 11 月 16 日~17 日, 福岡市

加藤唯, 渡邊あゆみ, 佐藤祥子, NICU 入院中の母親の搾乳への思い, 第 52 回日本母性衛生学会学術集会, 平成 23 年 9 月 30 日, 京都

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 祥子 (SATO Sachiko)
東北大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：50271961

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()